

---

# 灰色の星

たけ10005

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の星

### 【Nコード】

N0707F

### 【作者名】

たけ10005

### 【あらすじ】

ケンタウルス族の王子、ゼイオンに平民の歌姫、ローラは一目ぼれをしてしまった。しかし、そのときケンタウルス族は人類より優れていることを理由に人類制圧をもくろんでいて一触即発の状態だった。しかし、ゼイオンは国交の折に湖で一人歌っているローラの歌声を聞いて以来、お忍びで聞きに行くようになりいつしか2人の間に愛が芽生えた。この後の悲劇はわかりきっていたのに……。文章長いと感じたら、各章前書きに最低限の説明があるので参考にしてくださいませ。前書きでは伏線なし。素人なので、エラーがあります。

すが気にしないでください

## 歌姫ローラ（前書き）

街の小さなバーのステージの歌姫には、秘密がありました。誰もが知っていますが

## 歌姫ローラ

私は。

私は、貴方に振り向かれずとも永遠に想い続けましょう

私は、たとえ種族はおるか、身分すらも違えど追いつけましょう

私は、いずれは貴方と同じ場所へ、同じ目の高さへと昇っていきましよう

私は、必ず貴方にとって必要な存在になりましょう

たとえそれが、かなわぬ願いだとしても

たとえそれが、許されぬことだとしても

たとえそれが、幾多の困難に見舞われることになろうとしても  
たとえそれが、この身を滅ぼすことになろうとしても

私は、話をしながら歩いている時や待ち合わせの時、目が合った時のあなたの微笑が好き

手と手が触れ合った時、そっと寄り添った時の安心感が好き

身体を重ねあう時よりも、唇を重ねる時よりも、手と手を握り合つて、息がかかるくらいに近づいた時、手のひらからお互いの全身を感じあえるとき、この世にたった二人だけが存在しているかのようにさえ思える瞬間が好き

男と女の関係だけが恋じゃない。同じ生き物として、敬愛し合える仲の上に男女の恋が芽生えた時こそ、本当の”恋愛”が始まる

- - - - 灰色の星 - - - -

「おい、聞いたか。ローラちゃんの噂」

「ああ、ケンタウルス族の王子とできてるんだってな」

小さなバーのステージで歌を歌っている時にそんな話が聞こえてくるようになったのは、ここ最近のことだった。

「応援したいけど、もしものがあつたらどうする気なんだろうな何年か前、村の美女コンテスト優勝したときは将来楽しみだったが・・・」

うんうんとうなずきながら、テーブルを囲んでいる人たちの元に一人の酔っ払いが怒鳴り込んでいった。

「お前ら、歌くらい静かに聞けよ」

それを受けたお客さんたちが、悲しみとも驚きともつかない顔でたしなめた。

「おいおい、落ち着いてくれ。悪かったよ」

「ちくしょう」

ファン達の何人かが机を叩き、飛び出していき、頭を抱える。今までも沈んでいたけれど、今日初めて気にかけていたことが起こってしまった。最後の理性とばかりに、その場に残った人たちが静まり返った。

歌い終わると、すぐに中心になったところに行った。

「ごめんなさい、私のせいで」

「いいんだよ、どうにもならないさ。ただ、面倒にまで発展しなければ良いのだが」

お客さんたちは、苦笑しながら答えた。最近はずっかりよそよそしくなつてしまい、オーナーにも迷惑をかけてしまつてる。

オーナーが中に入ってきた。

「ローラちゃん、すまないが、これ以上面倒が起これるとお互いに良くないし、今日で最後にしてくれないか」

いつかは来ると思つてた。

「あ、いえ。気にしないで下さい。いままで、ありがとうございました。」

マスターはポケットを探つて青い宝石一つだけついている、シンブルなネックレスを取り出した。

「退職金代わりといつちやアレだが、これをもらつてくれ」

「そんな、悪いです。私のせいでこんなことになつたのに」

「いいんだ、こっちから言い出したことだし、ローラちゃんが遠慮することは無い。これは強く願うと災いから身を守ってくれるらしい。今のローラちゃんには必要だろう」  
「ありがとうございます。大切にします」

家の前で母子が歩いていていた。

「ここの人たち、悪い人なんですよ」

子どもがそういうと、母親が止める。

「そんなこと言っちゃいけません！聞こえたらどうするの!？」

家に帰ると、暗さがにじみ出ている。

「ただいま」

月光に照らされて黒く塗りつぶされた顔が二つ、向かい当たって俯いていた。

「お帰り」

ほぼ同時に声がする。父は職を失って数日になり、飲んだくれるわけでもなく温かく迎えてくれる。

「あれ、どうしたのそのネックレス」

「うん、今日お店で買ったしちやって、止めることにしたの。そしたらオーナーがくれた」

二人は押し黙る。父が深刻そうな顔をしながら、二人とも聞いてくれという。

「万が一の時、私は。」

巻き込まれないようにローラだけでも逃がす場所を確保するべきだ」

「でも、どうやって？」

母が質問する。

「だから、それを相談するんだよ」

「私は逃げたくない。みんなを残して、一人だけ逃げるなんて嫌」

ローラは部屋に閉じこもる。二人とも何も言わない。何か言つてよ。

私、どうしたら良いの？ゼイオンの絵を見ながら問う。

「もう寝よう」

ローラは一人こちる。



## 愛の行方（前書き）

酒場を首になったローラの行く末は！？  
現実はずさまじい勢いで迫ってくる

## 愛の行方

暖かい風に吹かれ、草花がゆらゆらと揺れている。

木々はささやき、鳥は歌い、そこはまるで楽園のよう。

私の唯一の心の支えが、今では幸福を称える賛歌となっている。

「ゼイオン様、早くいらっしやらないのかしら」 愛する人の名を呼ぶ。ただそれだけで、泉に妖精が舞い降りたように幸福という名の波紋が私の体をやさしく走り、包み込んでくれる。

数日前は、愛してはいけない人を思い、心の涙を声に変えて一人唄っていた。数ヶ月前は、貧困生活を送るすべての人々の支えになれるよう練習を重ねていた。

数年前は、とてもすばらしい楽園を見つけ、お気に入りの歌を口ずさんでいた。

この森とともに生き、この森とともに笑い、悲しいときは大木の根元で泣いていた。

そして今は私の恋の舞台となり、この泉の前のステージに立つ私の唄を、草花に囲まれたゼイオン様が静かに微笑んで聞いてくださる。

「ね、チツチ。今日は太陽が一番上に来る前にいらっしやるかしら。昨日なんて、太陽が沈んでもいらっしやらなかったから、寒くなつて震えてたのよ？」

「チユンッ」

まるで私を元気付けてくれるかのようにタイミング良く鳴くチツチ。いつのまにか私の肩が特等席になった、青い体に澄んだ瞳の小鳥。

「ふふつでもね、月光が泉に移って、綺麗だからもう少し居ようかなつて思ってた時にいつのまにか隣に座って私を見てたのよ。私ビツクリしちゃった。しかもそのとき、なんて言っただろう？」

「チユン」

ステップを踏むようにせわしく動き、小首をかしげるチツチ。  
「月光に染められたローラの横顔を見たかったんだ、だって。笑っちゃうでしょ？あんまりにも恥ずかしくて、つい俯いちゃった」

ちよつとゼイオン様の顔を真似してみる。実際には笑いをこらえるだけで精一杯で、かなり変な顔になってるかもしれない。

「そしたらね、もし前日に夜来ると言ったら綺麗に青く染まるはずの顔が赤面して紫っぽくなって、不自然な笑みを浮かべるだろうって言うのよ」

チツチに手をかざし、手のひらに移動させる。

「せっかく一言いってやろうとおもったのに、先を越されただけじゃなくて笑われたのよ？もう。そんなに顔赤くなってるかな」

「チチチ……」

全て言い終わる前に、回れ右をして飛び去っていくチツチ。

「どうやら俺が来ると行ってしまうのだな、あの鳥は」

自嘲気味に、でもはつきりした口調でつぶやく。

「ぜ……ゼイオン様！」 さっきの話を聞かれてしまったのかしら？本当にこの人は嫌なタイミングで来る。

「おやおや、ローラまで俺が来るのが都合に悪かったのか」

わざとらしくやれやれと手を上げ、小首をかしげる。

「そ、そんなことはありません。早く来て下さってうれしいです。本当に」

まるで初めて舞台上上がった役者の卵のよう。今にも後ずさりしそうな足を必死で止めようと地面を踏みしめる格好がなおさら変になり、それを見て笑うゼイオン様。

「も、もう知りません！ゼイオン様なんて嫌い」

後ろを向き、泉に映った私の顔を確認する。大丈夫だ、ちゃんと怒ってる。

「おいおい、冗談だよ。機嫌を直してくれローラ。せっかくの綺麗な顔が台無しだぞ？君に会いたくて来たのに後ろを向いちゃ見えないじゃないか」

「お、怒ってなんかいません！……っ」

なんとか出そうになった言葉を飲み込む。ここで私も……なんて  
いった日には、完敗じゃない。

嫌な人。いつも人より先を行って、自信たっぷりで、私なんて専  
属の歌手が何かとしか見てないんだわ。

いつも人の心を見透かしてるような態度で……私のことも、わか  
ってくれてるってことなんだけど。やさしくして欲しいときはやさ  
しくしてくれて、寂しいときはずっと肩を抱いてくれて……いつも  
じらしてばかりで……意地悪……でも、大好き。

「くうっ……！」

いつもの場所に移動しようと数歩歩いたところでゼイオン様がい  
きなり私をつかみ、振り回そうとして倒れんできた。

「やつ？」

突然のことで少し背中を打ってしまった。頭は大きな手が下敷き  
になってそんなに痛くない。

衝撃が和らぐまでどうしていいかわからず目をつぶったままだっ  
たことに気がつき、恐る恐る目を開けてみる。

ゼイオン様の顔がすぐそこにあり、一瞬のけぞろうとしても押し  
倒されて動けない。

ただ、何かが違っていた。

そう……なにかが。

「ゼイオン様？」

その人の名を呼ぶと、ぴくりと体が動いた。顔はやや微笑んでい  
るものの、眉はハの字になっている。

「どうなさったのですか」

そういつて頬をなでようと手を伸ばしたとき、それは見えた。

太陽を、光を両断する黒い影。

それは、天高く聳え立つ巨頭のように。

それは、光すらも断ち切らんとする漆黒の黒。

それは、全てを飲み込む闇。

その先にあるもの。それは、羽。

それは、天空を飛ぶ鳥の体。

それは、軽くて柔らかな私の好きなもの。

それは、風を切る刃。

羽と黒く長い影。それが示すものは、今この状況では一つしかなかった。

ありえない。そんなはずは無い。何かの間違いよ。

「ねえ、ゼイオン様：嘘だといって？」

何も言ってくれない。いつもなら、笑ってごまかしてくれるのに。「お願い、笑ってよ……ねえったら！」

もう、何がどうなってるのかわからない。やさしくあの人の頬にそえたはずの手が、今は壊れたおもちゃを振り回して泣き叫ぶ子どものようにただ頭をつかんで揺すり続けるしか出来なかった。

ピチャン……

あるはずの無い音がした。ありえない。ここは土の上だもの。土の上？何故土に落ちた雫と分かるの？

そうだ、泉に雨の雫が落ちただけかもしれない。

空はこんなに晴れてるのに？

きつと、小動物が飛び込んだんだ。

下敷きにされたままの左手に触れているものはなに。

この暖かい水のような感触はなに。

なに？なんなの……

「ねえっ、答えてえ！」

空気を切り裂く音がした。

すぐ横を弓矢がかすめる。

弓矢。あの人が得意だった武器。

そして……あの人を貫いた悪魔。

……た。だった。だったって、なに完結させてるの？

「そんな男に会いに行くなといっただろう！」

お父さん？どうしてここに。

「貴方たちには悪いけど、かなわぬ恋だったのよ」

お母さんまで。

どうして、どうして……

何が悪かったというの。私がこの人に恋をしたから？

この人と私が出会ってしまったから？

「どうして？何でいつも私を置いて行っちゃうの、なぜいつもそばに置いておいてくれないの。こんなときはばかりこんなにすぐ近くにいて。でも、もう触れても微笑んでくれなくて……」

惨めよ。許せない。こうして私を置いてっささといってしまっ人も、私たちをこんな窮地に追い込む国も。

涙が出てくる。止まらない……

「ねえ、どうして。どうしてなのよお！」

目も開けられないほどの光が差し込む。

暖かく、やさしい、太陽。

「夢？」

ゼイオン様が来て下さって、からかわれたところまでは昨日実際にあったことだった。

今はただ、この光が全てを物語ってくれる。かわらずつ包み込んでくれる祝福の光。異国では神として崇められているもの。

「ローラー！」

大きな音を立ててお母さんが血相を変えて駆けつけてくる。その後ろに、不安そうなお父さんが顔を覗かせる。

「あ、なんでもないから。気にしないで」

「なんでもないって、貴方。また、あの人の夢を見たのね」

そう、ここ最近ずっとだった。私たちの仲が噂となって広まり、それはやがて確信へと変わっていった両国が下した判決は、戦争だった。

引き金を引いたのは、私たち。そして、その罪を背負わなければいけないのも私たち。

誰も応援なんてしてくれない。孤独な戦争。これもまた闘いなん

だ。

ローラは、何も言えずに言葉を搜す。

「もう別れるといったらう」

「お父さん、もう別れたところでどうにもならないよ」

すかさずお母さんも応戦する。

「だからって、そのまま悪夢にうなされるつもりかい」

ローラは口を尖らせる

「もう、やめよう。無意味だよ、こんな議論」

そして決まって、お互い俯いて食卓へと移動するのが日課になってしまった。

いずれは変わるかもしれない。2人の中のどちらかが死ぬか、どちらかの国が滅びるか、降伏すれば。

でも、きつとあの人がかしてくれる。誰よりも先をいって、誰よりも強いあの人だ。

森についてあたりを見回しても、誰もいない。あの泉水のほうにいるのかしら。

やっぱりいない。きつと、まだ忙しいのよ。今日は聞いて欲しいこといっぱいあるんだから、きつと来てくれる。

最初にきた時はまだ日が昇る前だったのに、もう夕日があたりを赤く染めていた。

「綺麗だね、チッチ。あの人にも見せてあげたいわ。また何か企んでるのかしら」

そういうと、今朝の夢を思い出した。昨日の夜、やっと来てくれたゼイオン様の実際の言動の夢を見ていたはずなのに、途中から殺されてしまう夢。

今はもう、夕日が真っ赤な血に見え、血に染まった泉が風によって悲しく波打っていた。それは、終焉を迎えた静かな鎮魂歌のように、かすかな木々や動物のささやきが、鳴き声を必死に隠そうとしているようで身震いした。

もしかしたら。そんな、けして否定できない予感がよぎる。遠くから見ていただけの日々、いつまでも幸せになれると信じる事が出来たあの日、全てが幻影のように思え、静かに闇が蝕んでいった。

月光に照らされ、モノクロームの世界でただ一人待ちつづける私の姿は、ゼイオン様の望んだ姿なのだろうか？こんな私を見るために、待たせていたわけではないですね。でも、少し不安になります。早く、できるだけ早く来て下さい。そうでないと、ゼイオン様を信じつづけることができないから。

乾いた、枝の断末魔がかすかに聞こえた。

「ゼイオン様」

やっと来てくれた。そう思って振り向いても、誰も出てきてくれない。

わずかに感じたような気がした視線はなんだったのだろう。そう考えた時、暗殺という不吉な言葉が脳裏をよぎった。お願い、助けに来てくださいといいそうになり、頭をふる。もしそれで来てくれたとしても、万が一のことがあったら。

逃げなくちゃ。とにかく、それだけを考えて懸命に走った。



## 激突（前書き）

夢にうなされるローラ。しかし、現実はずさまじい勢いで迫ってくる

## 激突

「ローラ！伏せろお！この、化け物があ！」

護衛の一人が、無理矢理ローラを押し倒して、弾みで転げながらデタラメに弓を放つ。

「グオ！」

誰の声かわからない。野太い声が、飛び交い、俊<sup>はし</sup>り、交わる。

怖い！でも！ここから逃げなきゃ、たくさんの人が死ぬ。ローラはきびすを返し、木の裏をつたい、徐々に間合いを広める。

「ローラ！」

聞いたことのある声。ここには来ないかもしれないと思った声。

「ゼイオン様！」

危ういところをゼイオンに助けられる。

「無傷か、よかった。闘ってるのは誰だ？」「私たちを応援して、私をここまで連れてきてくれた人。助けてあげて！」

ゼイオンは一瞬近衛兵に笑いかけ、走る

「皆さん、ご迷惑をおかけした！」

ゼイオンは絶対当たらない距離のところに弓を放ち、ケンタウルス達を威嚇した。

「貴様ら！弓を退け！」

「なりませぬ、ゼイオン様！このものたちとは敵対関係です！人間の女などに惑わされず、私どもの御前に！」

ケンタウルス軍は構えだけをして、戦闘を中止。戦いに不慣れなローラ親衛隊も弓をしまう。

「すまない、みんな。。。ローラ！泣くな！泣くのは戦争が終わってからだ！」

精神的にこたえているローラを抱きしめて活を入れ、静める。

「俺はこれから戦闘を静める為最前線へ行く。俺に乗れ！そのほうが安全だ」

「はい、皆さん、逃げてください。ケンタウルス軍のかたがた、こ  
こは退いてはいただけませんか！？私の大切な人たちを、これ以上  
失いたくないんです！」

「ゼイオン様！…つく！皆の者、退くぞ！人間は捕虜にして丁重に  
城にご案内しろ！」

「はっ！」

ケンタウルス軍の面々は、隊長の指揮のもと退陣。親衛隊も、自  
らの宿命をゼイオンに託して武装解除した。

## 終戦（前書き）

ローラとゼイオンの未来は！？ 世界平和は訪れるのか？

## 終戦

兵士達を説得する為、ケンタウルス軍の將軍に会いに行く。

「將軍、私だ。すぐさま武装解除して、戦争をやめさせろ！これは私たち二人の問題だ。国家を動かすのは止めさせるんだ！」

「なりません。王が決めたことです。一兵士である私の出る幕ではありません。お言葉ですがゼイオン様：やはり人間とケンタウルスでは住む場所も生活も違うのです。歳をとってから後悔しては遅いのです。どうか、お引きを！」

「もはや若気の至りとは思いつた。だが、しかし誰かが動かなくては、にらみ合いは続く。遅かれ早かれ、こうなるのではないか！？ならば、かすかな可能性に賭けてみたかったのだ」

將軍は、軽くため息をつき、うつむく。

「私には、家族がいます。しかし、子供は人間が嫌いだといいます。他人を簡単に陥れ、だまし、殺すから。鬼人のごとき存在、とさえ」

「すべての人がそうではない。影があるということは、光があるということ！それすなわち、我等がもう一つの太陽となって、伸びた影を照らし、最小限の影で済みます。そんな世界が作れるはずだ」

將軍は、今度こそはつきりため息をつき、気を取り直す。

「まったく、あなたという人は…とにかく、ここから脱出してください。私は何も見てない、聞いてない」

人間とケンタウルスの追っ手が来た。

「ローラ、お前だけでも逃げろ。俺が足止めをする」

「しかし、ゼイオン様…」

ローラは懇願するように、抱きつく。

「いけい、ローラ！これは命令だ！」

ローラは、一瞬恐れおののき、それでも食い下がろうとするが、ゼイオンの目を見て反論をあきらめた。

「皆の者、止まれい！」

「ごめんなさい、ゼイオン様」

ローラはさらに遠くに走って逃げ出す。そこには最大の罠があるとは知らず…

「ローラとやらは、そなたかえ？」

走りつかれ、とぼとぼと歩いているローラに、見知らぬ老女が話しかける。

「はい、私がローラです。あなたは？」

さすがに、こんな老女が敵とは思わず、キョトンとして尋ねる。

「わしは名も無き老人じゃ。…と、どうかボケて、名など忘れた。ヒエツヒエツ」

不気味な笑い声、ナンセンスなギャグ・・・これは大変な人に絡まれたと、ローラはお辞儀だけして走り去ろうとした。

「さてさて、見るところに、そのネックレス、かなりの上物じゃな。少々わしにも見せたもれ」

店長がくれたネックレス…思い出を捨てきれず着けていたけど、ゼイオン様はそれどころじゃなかったな…せめて、この人にだけでも見てほしい。ゼイオン様とは、もう会えないかもしれない。戦争が始まったのだから。。。

ローラは老女にネックレスを見せた。

「ちよつと触らせてくれんかのお？はずしてくれるかえ？」

ローラは一瞬躊躇したが、まさか持って走って逃げるわけでも無し、追いつけないわけでもなさそうだと、安直に考えて差し出す。

「ほお、良い物じゃのお…ストーン！」

「きゃっ!？」

ローラの足に向け、老女は手を伸ばして魔法を放つ。魔女。まさか本当に存在したなんて。

なんの感触もなく、神経が途切れていくように全身の感覚がなくなってきた。

・・・石化・・・

「ゼイオン様あ！」

「ローラ、無事なのか？ローラア！」

良かった。ゼイオン様だけでも無事で。

ゼイオン様、最後に一つだけお願い、いいですか？貴方が私の元に来てくれた時は冷たいかもしれないけど、もう女の形をしたものでしかないかもしれないけど、思いつきり抱きしめてください。この数日間、ずっとそれだけを願いつづけてきたのです。

「ローラ……なんてことだ、まだ何も解決してないのだぞ。まだ、何も終わってないじゃないか。元に戻ってくれ」

そういうと、ゼイオン様はもうほとんど石になった身体を抱き寄せてくれた。何も感じなかったはずの身体が、確かな暖かさに包まれていく。

ポタ…ローラのほおに、水滴がひとしずく…

もう、笑うこともできていないかもしれないけれど、きっと私の気持ちも伝わってくれていますよね。愛しています、いつまでも。それだけを支えにしました。

薄れ行く意識の中で、ゼイオン様の顔が近づいてきた。良かった。伝わったんだ。答えの変わりにくれた唇が最後の記憶になったことを幸せに思います。だって、最後の最後まで貴方を感じられたんだから。

「貴様、噂に聞く魔女か！？存在したなんて、王の差し金か！？」

「そなたは、噂のゼイオン殿かえ？やはり若いのお…いかにも、わしはケンタウルス軍の王に代わられて少女を石化した。そして、王子も…ストーン！」

再び魔女は呪文を唱えると、ゼイオンは危険を察知して後ろへと身を退く。

「貴様の視線に入りさえしなければあ！」

ゼイオンは真っ先に魔女に突進し、頭を飛び越え後ろに回り、懇親の足蹴りを食らわそうとする。

「なんの！わしは魔女、能力を人間以上に上げるなど、どうさも無いこと！観念して降伏せい！王には石化しろと命を受けている。この少女とともに散れい！」

魔女は話しながら前に飛び、半ひねりでゼイオンのほうを向くと、空中で呪文を唱える。

「ファイヤー！」

業火がゼイオンを襲う。避けようとするが突然の、いやそれ以上に予想しえない体術の前になすすべも無く、焼かれる。

「ぐおう！」

しかし、致命傷には値しない。確か魔女は、石化すると言った。ならば、そこにこそ勝機はある。

すばやく背中に背負った弓を構え、着地点に矢を放つ。当然、魔女はよけるだろう。しかし、とんだ反動で横に跳ぼうものなら、次の一矢でバランスを崩して倒れる。そして、バックすればその予想地点に矢を放って射殺することができる。

「そこだ！」

決まった！そう思ったとき、魔女は呪文を唱える。

「シールド！甘いわ若造が！そなたが何もしないと予想すると思っ  
てか！？わしを見くびるな！」

「ちい！…なぜさつき石化ではなく炎の魔法を使ったのだ？」

「久しぶりの強者…少々興味を抱いてのお」

完全にこちらを見下しているって訳か。なされるがままなのも今のうちだ。

魔女の弱点はわかった。呪文は二つ同時に使えない。なぜなら、できるならシールドとともに石化もできたからだ。矢を放っている間動いたら、起動がずれる。こちらの動きを先読みできる戦闘のスペシャリストが、そこを狙わないはずは無い。威嚇として、矢を連射する。

「どうした！？防御するだけか？ならばこちらから！」

ゼイオンはまた突進すると、シールドの上から蹴り飛ばす。激痛



が走る。

「…っ！」

二人は同時にはじけとび、倒れる。まさかシールドに触るとはじけ飛ばされるとは。

馬の体とは不自由なもので、倒れると人間より起き上がるのが遅い。コンマ1秒の遅れが、お互いどちらかの負けにつながる。

「これで最後だ！」

ゼイオンは、倒れたまま懇親の矢を放った。起き上がる暇は無いと判断。態勢を立て直す前に横たわったまま矢を放ったのだった。これにはシールドの唱文時間は間に合わない！

「ウインド！」

ゼイオンの矢は外れた。魔女の腕をかすただけだ。シールドでなくウインドを使ったのは、頭ではない。もはや脊髄反射だ！幾多の戦い、試練修行を経験しただけの神業である。

魔女は、ゼイオンの武器は矢しか無いことを知っていたから、風を起こして軌道をずらした。魔女の方腕に激痛が走る。

「ぐう！やるねえ、若造！しかし！ストーン！」

ゼイオンはかろうじて起き上がって回避。次の一撃でしとめようと構える。

「ストーン！」

「なに！？」

二発目の連続魔法。同種とはいえ、普通術式に時間がかかり、間には数秒の時間が必要な魔法をコンマ単位でやってのけた。ケンタウルス王、フランスの認めた大魔女のみができる離れ業だ。同時ではないが、回避地点を読んだのだ。

ゼイオンは及ばず、石にされる。

「これが、あの二人ですか」

將軍は、魔女に問う。

「いかにも。こうとなっては、もはや二人を蘇らせることはできません」  
「それは…きれいな宝石のネックレスですね」

魔女の手元にあるネックレスを指差し、将軍は問いかける。

「対魔石じゃ。これをもっているものには、いかなる魔法も無効化される。ローラとかいう少女が持ってたものじゃ」

「それを身につかせると、治るのですか？」

魔女は頭を振る。

「こやつらはもう死んだ」

将軍は、二人を見る。まるで、今にも動きそうだ。

「もうしわけないが、それを譲ってくれませんか？この娘にかけてやりたい」

魔女は、少し考えたが、まさか自分が魔法で殺されることは無い。持っただけでも無駄だ。そう判断し、将軍に渡す。

将軍は、ローラの首にネックレスをかける。

「どうか、安らかに眠ってくれ」

将軍は、ローラの中から、涙が流れた気がした。

「疲れてるみたいだな。それでは、帰ります。ご苦労様でした」

2人の石は隣同士に置かれた。

夜が更けると、ネックレスが光る。

すると、驚くべきことにローラの体が光り、元に戻る。

「ゼイオン様！…これは…？ああ…ゼイオン様…石にされてしまったので…」

ローラの体が重くなる。ネックレスの光が弱まっていく。

「ゼイオン様！」

ローラはゼイオンの首に手を回し、抱きつく。

光が、はじけた。ネックレスは砕け、ローラの体は再び石に。

翌日、両軍は、二人の石を回収するため、二人の石の前に立った。

しかし、そこにあつたのは二人の抱き合っている石。ありえない。将軍と魔女は同時に思った。

「ばかな！？ネックレスは生きている時のみ効果を発揮する！生き続けていたのかや！？わしが使った魔法が不完全だとしても！？否！

これは意志の力だ！奇跡だ！」

朝、魔女はケンタウルス軍の兵たちを呼び出し、事のてんまつを告げた。

「これはきつと、全知全能の神ゼウス様の御心である！皆のもの、直ちに戦争をやめ！これは命令じゃ！」

ケンタウルス軍は動揺する。

「な！？何の権限があつてそうする！？」

「渴っ！」

魔女は一喝する。もともと両軍に利益の無い戦争だった。

「だまらんしゃい！わしの言うことが聞けぬのか！？」

ゼイオンを倒した魔女に口を挟めるものなどいなかった。

西洋の魔女とうたわれた魔女に圧倒され、王も神ゼウスを恐れて終戦へ……

号外”ケンタウルス軍は休戦を要請。平和条約を結んだ。理由は。。。”

「かわいそうですね。とある軍曹が少尉に呟いた。

少尉は鞭で威嚇し、軍曹は固く目をつぶる。……しかし、一撃は来なかった。軍曹は少尉を上目遣いに見やった。

少尉の目には涙があふれ、空を仰ぐ。人、だからだと人類は言うかもしれない。しかし、ケンタウルスもまた泣いている。

「そういった一言で済ますな、軍曹。貴様は若すぎる。奇跡。それが二人へ送れる唯一の手向けだ。二人はきつと幸せさ。永遠にそのままの姿で、そばにいられるのだからな」

「彼らは希望の星だ！灰色の星だ！」

皆で喝采し、その像と話は語り継がれた。

もちろん人類とケンタウルス国の間のあの二人が出会った森に祭られた。湖の前。きつとまた動き出して、微笑みあう日が来るから

ローマの広場には、ケンタウルスと人の像が立っている。

ローラとゼイオンの悲劇の像が、数千年たった今でも残っている

からだ。けっして風化せず、動かず。永遠の愛を歌う。

「おじいちゃん、あれは何なの？」

「あれはのう．．．昔話の石造じゃ。話では、人類は様々な妖精や獣と住んだ時代があるという。ホントかのう．．．？」

「本当だよ、きつと！人はみんなやさしいから！」

無邪気な子供。大人というのは残酷だ。しかし、無垢な少年が育つ世の中は捨てたもんじゃないな…と思う老人であった。

## 終戦（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます！今回は初のファンタジー！原案は5年ほど前に考え、最近肉付けしてこのたび、日の目を見ました。もっとも、5年間何の執筆活動もしてませんでしたw

最後の最後でバグ直すやり方わかったかも。できてますか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0707f/>

---

灰色の星

2011年1月14日03時58分発行